

平野秀吉と相馬御風の交流

榎田善衛

和六年一月一日、昭和七年一月一日、昭和十二年一月一日で、すべて年賀状であることが明らかとなった。詳細は次のとおり。

葉書（昭和六年一月一日消印）（図1）

（表）糸魚川町

相馬御風 様

（裏）恭頌新年

昭和辛未元旦

高田市西城町三丁目

平野秀吉

一、はじめに
平野秀吉が相馬御風に宛てた書簡が発見された。その詳細を示すとともに、この書簡から二人の交流がいつからどのようなようにはじまったのかについて考察する。さらに、相馬御風と親交のある木村秋雨と平野秀吉の交流についても述べる。

ちなみに、平野秀吉は明治六年（一八七三）六月五日¹、相馬御風は明治十六年（一八八三）七月十日に生まれており²、平野秀吉は相馬御風より十歳年上となる。

二、相馬御風宛て書簡の発見

平成二十六年七月二十五日（金）に糸魚川歴史民俗資料館（相馬御風記念館）を訪問した。目的は、平野秀吉が相馬御風に宛てた書簡（葉書・封書）を確認するためである。書簡は、葉書・封書を併せて全部で五通。

まずは、葉書から示す。葉書は全部で三通。消印を確認すると、昭

葉書（昭和七年一月一日消印）（図2）

（表）糸魚川町

相馬御風 様

（裏）恭頌

昭和七年正朔

平野秀吉

葉書（昭和十二年一月一日消印）（図3）

（表）糸魚川町

相馬御風 様

（裏）恭頌新年

昭和十二年一月一日

高田市西城町三

平野秀吉

¹ 小泉孝『巻町双書第十七集 平野秀吉』巻町役場、1971、p.1。

² 藤巻道夫「相馬御風略年譜」、相馬御風遺墨集刊行委員会『相馬御風遺墨集』図版篇「資料研究篇」相馬御風遺墨集刊行委員会、2010、p.150。

次に、封書を示す。封書は全部で二通。消印を確認すると、昭和三年八月二十日、昭和七年七月十三日で、前者は火事見舞い、後者は御風亡妻に対する悔やみ状であることが明らかとなった。詳細は次のとおり。

封書（昭和三年八月二十日消印）（図4）

（封筒表）糸魚川町

相馬御風 様

（封筒裏）高田市本二辻町

平野秀吉

（文書）今暁貴町大火御類焼之由御氣

之毒と存し奉り候謹みて、御見舞申上候

八月十九日記

平野秀吉

相馬御風様

封書（昭和七年七月十三日消印）（図5）

（封筒表）糸魚川町

相馬御風 様

侍曹

（封筒裏）高田市西城町三丁目

平野秀吉

（文書）令夫人様御病気の処

薬石かひなく御逝去遊

はされ候由御愁傷の御事

と存候小生が御目にかかりしは

はしめて御宅を御訪ね申上げしをりにて候爾後二度御訪問之機もなくそのままにうち過候令夫人様之御印象ハ

失礼ながら小生之第二女ニ

似たる御方なりと当時

帰宅してのち家内に話し

たりしことこれあり候下枝ハ

そののち縁ありて金澤に嫁

きしが昨春二児を抱いて

夫に死別れ候に今貴下が

三子と共に御あひなされ候

御不幸人事ならず御同情

申上り候□□世間にこれある

例とはうけたまはり候へとも其

御身にハ又とこれなき大事に候

御哀悼を御つくし下されたく

謹みて御くやみ申上候

七月十三日

平野秀吉

相馬御風様

三、書簡から明らかになったこと

書簡で最も古いものは、昭和三年八月二十日消印の封書で、内容は火事見舞いである。これは、相馬御風略年譜にある「昭和三年

年（一九二八）八月、近邊の出火で類焼、蔵書・資料の大半を焼失³と一致する。また、書簡で最も新しいものは、昭和十二年一月一日消印の年賀状である。このことから、昭和三年八月二十日から昭和十二年一月一日までは、平野秀吉と相馬御風が交流していたことが明らかとなった。平野秀吉の人となりを示した書籍等⁴に、相馬御風との関係を示した記載がないので、本編がその初出となる。

四、二人の交流はいつからはじまったのか

平野秀吉と相馬御風の交流はいつからはじまったのだろうか。

はじめに注目した書簡は、昭和三年八月二十日消印の封書である。これは火事見舞いであるが、親しくない人に見舞い状は送らない。したがって、この時点で二人は相当親しい仲にあったことが推察される。次に注目した書簡は、昭和七年七月十三日消印の封書である。特に、「はじめて御宅を御訪ね申し上げしをりにて候爾後二度御訪問之機もなくそのままうち過候」（文書5から7行目）で、平野秀吉は相馬御風の自宅を訪問していることが明らかとなった。後述の文章によれば、そのときの御風夫人の印象が秀吉の二女とたいへんよく似ており、そのことを帰宅後、妻に話したとある。二女の名は下枝で、「しずえ」と読む。幸運にも下枝の長男、澈也（てつや）氏はご健在で、話しをうかがうことができた。この結果、次の三点に集約される。

（一）結婚した詳細な日付等は分からなかったが、第一子（長男）

の澈也が昭和三年九月二十五日に誕生していることから推察すると、結婚は昭和二年秋頃になる。

（二）下枝の結婚相手は、長谷川三樹也（はせがわみきや）（明治三十二年五月十日〜昭和六年二月十七日）といい、和納村（現新潟市西蒲区）出身、東京高等師範学校卒の教師で、結婚時は金沢（現金沢市）で教鞭を執っており、澈也と三歳年下の妹は金沢で生まれた。

（三）長谷川三樹也は結核を患い、死去。その後、下枝は二児を連れ、平野秀吉宅（現上越市）に身を寄せた。書簡中の「下枝ハそののち縁ありて金澤に嫁きしが昨春二児を抱いて夫に死別れ候に」（文書12から15行目）とあり、先述の聞き取り調査結果と一致する。ちなみに、書簡が昭和七年七月に出されていることから、「昨春」は「昭和六年春」となる。

以上を踏まえると、昭和三年頃、二人はすでに親しい仲であり、相手の家を訪れる等の交流があったことが明らかとなった。

五、二人の交流はどのようなようにはじまったのか

平野秀吉が相馬御風に宛てた書簡で最も古いのは「昭和三年八月二十日消印」の火事見舞いであるが、前述のとおりこの時点で「二人は相当親しい仲」にあったことが推察される。ちなみに、御風宅の大火以前にあったと考えられる平野秀吉の書簡はこの大火で焼失したと考えられる。それでは、二人の交流はどのようなようにはじまったのだろうか。相馬御風略年譜を頼りに検索すると、「大正十五年・昭和元年（一九二六）十二月、『良寛和尚萬葉集短歌抄』（春陽堂）を刊

³ 前掲2, p.153。

⁴ 小泉孝『巻町双書第十七集 平野秀吉』巻町役場, 1971, 94p。

⁵ 電話による聞き取り調査を、平成二十六年七月三十一日（木）、八月一日（金）、八月二十日（水）に行った。

行」という項目に目が留まった。平野秀吉は『良寛和尚萬葉集短歌抄』が刊行される三年前の「大正十二年（一九二三）に、『萬葉集全釈』第一次原稿脱稿」⁷し、萬葉集についてかなりの知見を有していた。また、平野は「十四才の春、秀吉は初めて親元を離れ、同郡国上村（現分水町）国上小学校に、やはり授業生として赴任した。（略）。秀吉は、校長の世話で、学校と道一すじ隔てた涌井唯一と呼ぶ大庄屋の二階の一隅を宿とした。（略）。涌井家の書籍を手当たり次第、勝手に引き出して読んだらしい。ある日、その積本の下から紙二、三十枚の写本が見つかり、秀吉はこれを暇に任せて書き写した」とあることから、平野秀吉は良寛が萬葉集歌の一部を写した写本を自身の手で書き写していたことになる。このことから、相馬御風が出版した『良寛和尚萬葉集短歌抄』（春陽堂）を読んだ平野秀吉は相馬御風に何らかの助言を行い、二人の交流がはじまったのではないかとの仮説を立てた。

しかし、この仮説を否定する記述が見つかったので次に紹介する。⁹平野秀吉は「昭和十九年の秋九月、小さな喪でその為に金澤市に至り、街頭に佐佐木信綱博士の『萬葉清話』を得た。其の中なる良寛和尚の萬葉集抄秋の野を読み、私に六十年をつづらの底に忘れ去られてゐた、涌井家に於ける寫本の寫本が是であると知つたのは、盲亀が浮木に逢つた喜び、踊りあがつて是を見直したのであるが（略）」とあるように、平野秀吉は昭和十九年秋にはじめて涌井家で写した写

本が良寛の萬葉集抄秋の野であることに気づいた。もし仮に、平野秀吉が大正十五年に出版された『良寛和尚萬葉集短歌抄』を読んでいたとしたならば、そこに収められている佐佐木信綱著「良寛和尚の萬葉抄『あきの、』に就いて」を当然目にしており、平野秀吉自身が涌井家で写した写本のことをこの時、すなわち交流がはじまったと仮定した昭和のはじめ頃に、思い出してもよいはずである。このことから、平野秀吉と相馬御風の交流が『良寛和尚萬葉集短歌抄』の出版にあつたのではないことは明らかとなつた。しかし、二人の交流がどのようにはじまったのかについては、未だ解明できていない。

六、その他の交流について

糸魚川歴史民俗資料館（相馬御風記念館）を訪れた際、木村秋雨、濱谷浩との交流を示す資料が二点見つかったので次に紹介する。

（一）木村秋雨所有の写真帳に平野秀吉の写真が掲載されていた。この写真の脇に、「平野秀吉老大人」と秋雨筆の説明書きが残る一枚の写真を確認した（図6）。写真の裏面に「平野秀吉先生 昭和十九、七、七 浜谷浩兄撮影 印（はまや）」（図6）とあつた。平野秀吉はこのとき七十二歳。和装した老人が畑中でたたずんでいる姿で撮影されている。おそらく、濱谷浩は木村秋雨と連れだつて、平野秀吉宅（現上越市）を訪れたものと推察される。

（二）木村秋雨の所蔵品の中に平野秀吉の短歌（短冊）があつた。短冊（図7）の表面は「山の上にて」と題し「我今し大白蓮の座にたちて 雲まにめぐる祢（ね）の九二をみる 秀吉」とあつた。ちなみに、「いまし」は「今」そ、たつた今、「ねのくに」は「上代、遠い国、地の底の国、黄泉の国」と解される。裏面は秋雨筆で「萬葉研究家

⁶ 同3。

⁷ 横田善衛「平野秀吉の偉業と会津八一について」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十六号』越佐文人研究会2013,p.59。

⁸ 前掲1,pp.2-3。

⁹ 平野秀吉『良寛と萬葉集』文理書院1947,p.8。

高田師範学校教諭 平野秀吉」(図7)と記されていた。以上のことから、木村秋雨は平野秀吉を萬葉研究家として高く評価していたことが推察される。

七. 結び

平野秀吉と相馬御風の交流をうかがわせる書簡が五通確認できた。これまで平野秀吉と相馬御風の交流を示す文章がないので新しい発見といえよう。二人の交流は「昭和三年八月二十日消印の封書」から「昭和十二年一月一日消印の年賀葉書」まで確実に続いていた。また、相馬御風と親交のある木村秋雨と平野秀吉との交流も明らかにすることができた。今後は、平野秀吉と相馬御風の交流がどのようなにじまったのかを明らかにしたいと考えている。

八. 後記

本編は平成二十六年三月一日(土)に糸魚川歴史民俗資料館(相馬御風記念館)を訪れた際、職員の前川幸雄氏に何気なく平野秀吉と相馬御風の関係を示す資料の有無を訪ねたことからじまった。原川氏は誠実な御方で資料等を細部にわたって熟知しており、研究をすすめる上で貴重な助言と資料提示を頂いた。同館の金子善八郎先生には相馬御風の人となりについて親切に教えて頂いた。また、平野秀吉の二女の子である長谷川徹也氏には過去の経緯を話して頂いた。さらに、書簡の积文等は新潟県立長岡農業高等学校教諭の高野和子先生のご協力を賜った。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

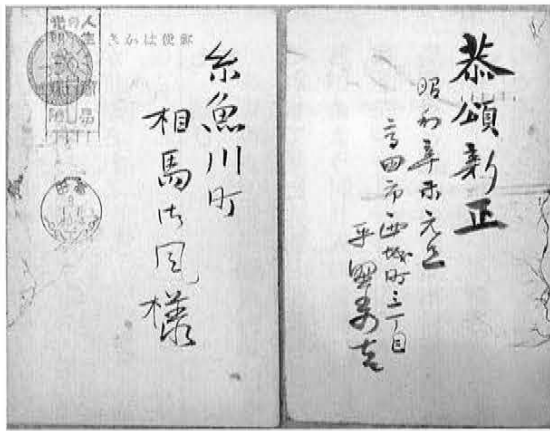


図1. 葉書 (昭和6年1月1日消印) 14.0×9.0

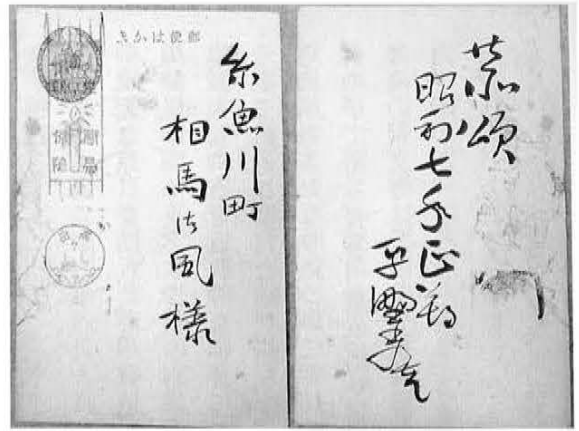


図2. 葉書 (昭和7年1月1日消印) 14.0×9.1

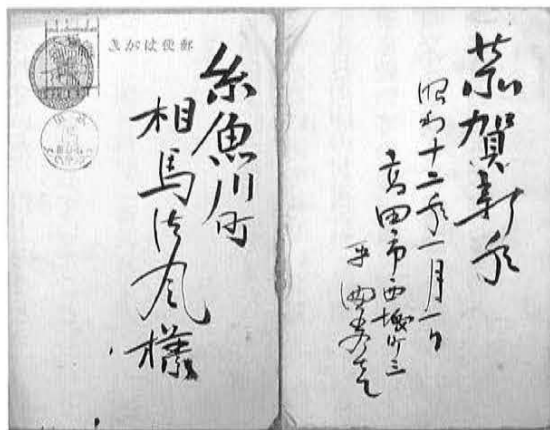


図3. 葉書 (昭和12年1月1日消印) 14.1×9.0

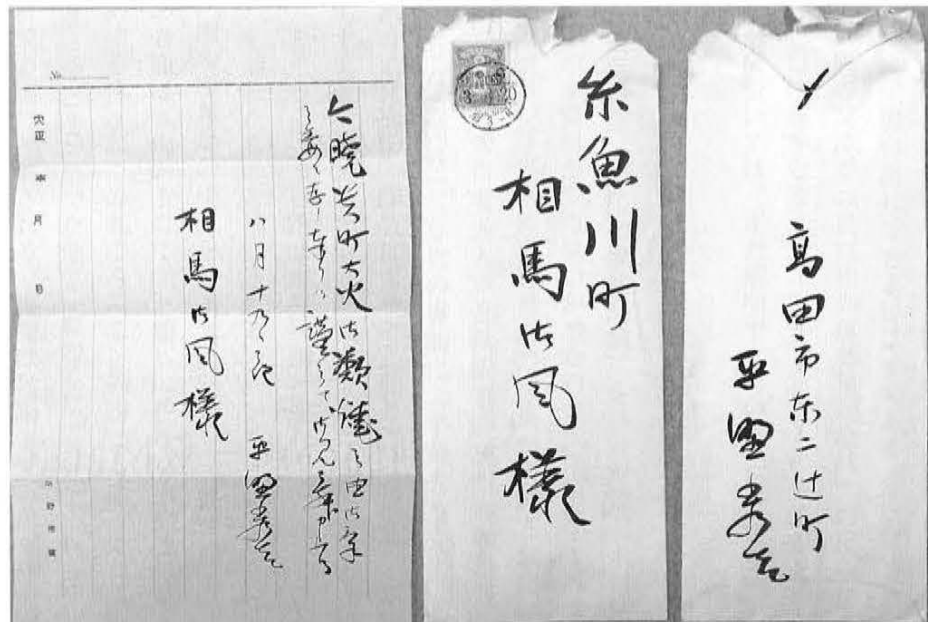


図4. 封書 (昭和3年8月20日消印) 22.3×13.9



図6. 写真（平野秀吉）15.8×10.9〔縁無：13.8×8.9〕

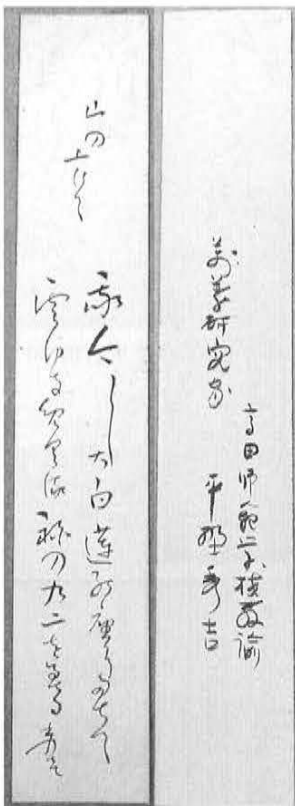


図7. 短冊（平野秀吉）36.2×6.1

図1～7は、平成26年7月25日(金) 横田撮影。
同年9月7日(日) 原川幸雄氏サイズ計測。単位はcm。